

多谷昇太

「花霞む梵」

空しき、益なき日々過し居りぬ。

今日も今日とて勤め終え、家路へと重走らす我。

今日は昨日のくりかえし、明日は今日のくりかえし
ならん。かつて命かけにシランポーの放浪旅、はた
そは何のたわけたりしか、痴れ事なりしか。

我ごとき匹夫の、また臆病者の為すことにあらざり
き、そも人としてすべからざることなりき。

二年ばかりを欧州に中近東に、またアジアに、無為
のポーポーとにただた過ぎし来たるのみのザマなれ
ば。今はもや三千、四十にして生きる甲斐なき恍惚
人となりぬ。はたそは親はらからへの忘恩、その罪
業と帰結、その因果でなしということあらざるべし。
されば彼の黒田二郎の詩、いかにもわがことにて違
わず。無為の戦に生き残りて戦友らと花札に興じ居

る詩人。のちサラリーマンとに世を送る、そこに不
条理の極みを見るよりは、いっそ屍（おろく）の兵
士でありたれば安けしものを。さのごとく我いま、
馬酔木の香に酔いしれ、咽ばざることなし…

かくばかり沈む心根に呼応したもうや、天。

この五月晴れの空を、花霞む、鈍き空模様としたま
えり。いまその西空に夕日かかりてあり。

日頃愛で止まぬ夕焼け空なれど今宵は鈍し。

パステル画のごとく焦点さだまらず、

日の輪郭さえも定かならずしてあり。

されどこれも描きしは神の御手。

地球生誕以来弛まずその御手もて描き続けたる、

数十億回分の一なる妙画というもの。

これもまた梵、霞む梵なりき…

走り行く河沿いの道、その路傍に目をやれば、

天国花の点々と咲きてあり。

赤、白、斑。

ああ、美しきかな、その姿。

年に二度咲く天国の大輪の花よ。

霞む梵なれど、我心模様なれど、

それにかわりて、時節違えず咲き映える、この花の
いじらしさ！

かつて天より勇みて降り来たりけむ我ら万人の、そ
のそれぞれの降臨の決意を姿に映し、「忘れぬ！」
の意地をば甲斐なき我らに示すがごとし。
この花の前、おのれ恥ずかしからずや?!…

いつまでむすぼれ、霞み続ける我心の陽。もはや許
されまじ。

彼の西条八十、その詩にて申されまじ。

荒野に立ちたる塚の水、残り少なし。軽ろけくば、
あす風に倒れなむとぞ。

父倒れ、母倒れ、兄、姉が行き…さば天の水の、し
こうして光の器たる人の本懐を為すはうぬ、もはや
おのれのみならずや?!最後に託さされし者にあら
ずや?!

荒野行く人あらば飲ませまほしきよ、この水。君が
渴きをば潤したまえ。君、この水飲みたまえ。

馬酔木の香の惑いを晴らし、霞に見えぬ梵を見さす
るはひとえにこれ、器の器たるを知り、その用をな
さんことなりと…いま知りたるを。

あなやもはや荒野に人來ず、もはや人あらず…

溜め置きしせめてものこの水、空しく霞と消ゆるか。
せめて、我悔悟遅れしにより、人も挑み來たなくな
りぬこの荒野中、いまだ立ちゐたる器と知れるばか
りを慰みに、悔恨の涙なり滴り落とし、
彼の花のごとく、

幻の小花の糧ともなりてしが…



「自由の子」

「ねえ、おじさん…」

「？」。ふり向くとそこに少女がいた。

瞬間的に世俗的な、また自己保存的な思いが頭をよぎる。

『この子は何だ？…かわいらしい子だ…こんなかわい子と話していたら、通行人たちはどう見るか…何かと誤解されはしまいか』等々のこと。

しかしそんな俺に一切お構いなく、少女は言葉をつなぐ。「ねえ、おじさん、あの雲はさあ、マリアナ諸島に行くのかなあ」「えー？」。

突然何を云うのかと呆気にとられたがつかられて空を見る。そこにはなるほど帆船のような形をした雲がひとつ、風に乗ってふうわりふうわりと、ゆつくりと南へ移動していた。

海に見紛う、抜けるような青空をバックにして。

『はあ、どうやらこの子はこの施設の子だな』と俺は見当をつける。

俺はタンクローリーの運転手で、精薄児の施設に油

を入れて来ていたのだった。

『ハハ、そうか。しかしまいったなあ、どう受けられいいのか』と困惑してしまふ。

「そうだねえ、行くかも知れないねえ」などと照れながら返事をする。

「ふーん、行くんだ。やつぱり。行きたいなー、ぼくも」となぜか自分を「ぼく」呼ばわりしながら少女は云った。さらに、

「ねえ、おじさん、ぼくもあの雲のお船に乗れるかなあ」と重ねて訊いてくる。

いまにも空に昇って行つて、乗船しかねないようなそんなあこがれいっぱいの表情（かお）をしながら…

しかし改めてよく見れば本当に何とかかわいい子だろう。十から十二才ぐらいの、映画の子役にでもしたいような、綺麗で聡明そうな子だ。

とても精薄児とは思えない。

しかしそれゆえの話しづらさ、話の受けにくさでもあった。俺はすっかり当惑し顔を赤くしてしまふ。

「いや、それは…」二の句を継げないでいると、
 「ああ、わかった。おじさん、恥しいんだねえ。ぼくが馬鹿だから」と少女は明るくあげすけに「云って俺を気づかってくれた」。

ところが俺と来たらもうパニックってしまって、地下タンクのメーターを見に行ったり、車のPTOを調節したり仕事に託けるばかり。

そのままうやむやな対応で終始してしまった。ほとんどこの子を放ったらかしにしたままで…

思ったことをそのままに、

なんの銜いも打算もなく、口にできるこの子は、まるで青空を行く自由な雲、

大海原を行く真っ白な帆船のようだ。

俺は一瞬、はたしてどちらが健常者なのか本気でわからなくなった。世間や、金や、しがらみや、いわばどうでもいいものに振りまわされ、人を選び分け、色メガネで見る俺は、はたしてまともなのか？

この子に会ったとき人はきつと驚くだろう。

この子は自分を馬鹿と云い、なにもできない施設の

子、生かされるがままの自分でしかないと、心のどこかできつと知っている。そしておそろくそれで満足している。

みずからを知る鏡というのではない。

その無原罪の波動と接したとき我々は、

自分の中で忘れていたなにかを見、

そしてそれに触れるのだ…

帰りの車中で俺はあの子に侘びた。

『ごめんね、お嬢ちゃん、君に応えられなくて。素直になれなくて。でもいつかきつと、君と同じような自由な心になって、あの船に乗るから…君といっしょにマリアナ諸島に、きつと行くから…』

